

【DXオピニオン】フロントヤード改革の理念先取り = 奥本清孝・株式会社乃村工藝社代表取締役社長執行役員（1）

24/09/30 07:00 NG66

昨今、公共施設の老朽化や防災、少子高齢化・人口減少といった社会課題が注目を集めている。こうした課題を「空間」で解決できないか。乃村工藝社（東京）が関わった北海道小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」は、デジタル化を進めて庁舎空間を単なる手続きの場所から多様な主体との協働の場にする「自治体フロントヤード改革」の理念を先取りする取り組みだったと、私としては考えている。

小清水町の旧庁舎は、建設から50年以上がたち老朽化していた。さらに2018年9月に北海道胆振東部地震が発生し、停電に見舞われた。町は「カルビーポテトチップス」発祥の地として知られるが、近年は過疎と高齢化が進む。人口4500人の町はコミュニティが希薄になり、主に役所には住民票や印鑑証明を取りに行くだけだった。

コミュニティ再生は久保弘志町長の公約でもある。新庁舎は役所の機能を備え、町民が日常的に触れ合い、災害時にも支え合うコミュニティ醸成の空間にしたいということで、取引先を通じて当社に協力依頼があった。

1892年、創業者の乃村泰資は香川県高松（現在の高松市）の芝居小屋の道具方となり、やがて菊人形（江戸時代から続く大衆娯楽。人形の衣装を菊の花や葉を生花のまま組み合わせで作る）の世界に身を投じた。その後、当社は空間創造のプロフェッショナルとして百貨店や博覧会などにも進出。日本全国で17の博物館・科学館などの運営管理にも携わり、2025年大阪・関西万博にも関わるが、自治体庁舎の経験は少なかった。

しかし年間3000社の顧客の課題に向き合ってきた経験がある。当社のミッションは、空間創造を通じた「喜びと感動をお届けする」。ルネサンス（東京）、OKULAB（東京）、モンベル（大阪市）など民間企業と連携しながら、新庁舎の開発コンセプト、「にぎわいエリア」の企画、庁舎全体の内装空間やロゴデザイン、開業PRまでを一貫して担当した。

昨年5月にオープンしたワタシノは、役場併設の複合機能施設としてフェーズフリー（身のまわりにあるモノやサービスを日常だけでなく非常時にも役立つようにデザインする考え方）の公的認証を受けた日本初の施設だ。南側の「にぎわいエリア」には、コミュニティスペース、カフェ、コインランドリー、フィットネスジム&スタジオ、ボルダリングなどの施設・設備があり、当社も参加するNPO法人が運営を管理する。誰もが集え、何度も訪れて長居したくなったり、人と人との新たな交流が生まれたりする「町民の居場所としての空間」だ。当社が提案したネーミングには「私の場所」という意味が込められている。

災害時には、一時避難所や炊き出しの場所になり、停電になっても温泉熱を使った床暖房で暖かく過ごせる。高齢者がジムやスタジオで体を動かし、学校帰りの若者がカフェに集う。町民以外の方が町に滞在する時間が増え、関係人口づくりにも寄与している。ワタシノを訪れる人は、旧庁舎時代と比べて4倍以上と聞く。

ワタシノは、ハード先行の従来の発想ではなく、にぎわいをもたらして皆が集う場所をつくろうという「ストーリー」を大事にした。乃村工藝社は取引先であるルネサンス社の紹介をきっかけに小清水町のプロジェクトに参加。当社がハブ（結節点）となって企業を結び付け、町と企業が連携していった。多くの企業に関わる官民連携で会議体が三つもあり、横連携の調整が必要だったが、乗り越えられたのは「ストーリー」を共有できたからだと思う。空間創造とはそういう仕事であり、これまで培った調整力が生きた。（あすに続く。聞き手はiJAMP編集部・樋口卓也）

奥本清孝（おくもと・きよたか）氏のプロフィール



奥本清孝・株式会社乃村工藝社代表取締役社長執行役員



小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」の開業式 = 2023年5月、北海道小清水町（北海道小清水町・グラウンドワークこしみず・乃村工藝社提供）

1965年、兵庫県生まれ。89年乃村工藝社入社、2010年執行役員。常務、専務を経て23年3月代表取締役社長執行役員。24年9月、小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」が「フェーズフリーアワード2024シルバー」（主催・一般社団法人フェーズフリー協会）を受賞。（了）

※本印刷物は時事通信社 iJAMPサービスから印刷されました。

Copyright JIJI PRESS Ltd. All Rights Reserved.